

一宮町長  
馬淵 昌也

私は日本の古典文学を読むのが好きなのですが、面白いと思うのは、平安時代から鎌倉時代にかけてのいわゆる公家の文化のユニークさです。特に面白く感じるのは、当時の貴族たちに、「音楽演奏の名手であった」と記される人の多いことです。『源氏物語』をはじめ多くの物語や日記によれば、天皇をはじめ、多くの皇族・貴族の男女には、笛・笙・琴・箏・琵琶・拍子・唱歌などの名手が揃っていたということです。そして例えば「月がきれいだ」というと、宮中から名手たちに使いが出され、呼び集められて月見の演奏会が開かれ、夜明けまで心行くまで合奏を楽しんだ、という記述がよく出てきます。諸外国でも、楽人に演奏させるというのはよくあったでしょうが、権力の中枢にいる人々が、同時に自ら演奏家であるというのは、さほど多くはないと思います。これは当時の日本文化の特筆すべき面白さであると思います。

また、当時の男性が「よく泣いていたこと」も大変印象深い特徴です。平安時代後期の公家 藤原成通(1097〜1162)という人はよく泣く人だったそうです。例えば武家の兄が弟

の手伝いをする様子を見て「兄弟愛の美しさ」に打たれ涙を流し、他の人から「泣くほどのことではない」と批判されたという話が『今鏡』に残っています。また、当時の貴族たちにとって、恋愛は、重要な関心事のひとつでしたが、「女性に振られて泣く」というテーマは和歌に頻繁に現れ、名作といわれるものも枚挙に暇ありません。武家文化が到来する前の日本男性にとって、泣くことは決して恥ずかしいことではなかったのです。

武士道こそが日本文化だと言われることがしばしばありますが、実は武士の文化だけが日本文化ではありません。江戸初期に書かれた『一休咄』という本の中には、気が荒い武家に対して、「公家の長袖」(武士が荒々しく腕まくりをしているのに対して、公家は長袖を着ておっとりしているという意味)と呼んで、公家が穏やかな性格であると語られています。平安朝の約三百年間、死刑に処されたものは一人もないそうです。気の荒い武家文化ではなく、こつした寛容を旨とする公家の文化が、かつて日本文化の主流だった時期があることも、私たちはもっと意識すべきだと考えます。